

平成 17 年度広島県道徳教育研究協議会（全体報告会）

パネルディスカッションの流れについて

1 広島県道徳教育の歩み（プレゼンテーション 15 分）

- ・豊かな心を育むひろしま宣言 フォーラム
- ・道徳教育実践研究指定事業
- ・「心の元気」の作成，「生徒指導充実のための実践事例集」の作成
- ・道徳教育研究協議会（文科省事業）
- ・高等学校の道徳教育
- ・1000人フォーラム 等

【亀井】

いかがでしたでしょうか。ここまで4年間の本県の道徳教育の歩みを簡単に紹介させていただきました。

さて，本日のこのパネルディスカッションでは，これまで本県が進めてきた道徳教育で何が変わり，どういった成果を实らせてきたのかを確認しあい，今後の発展のための足場を固めて行きたいと思ひます。また一方で，指定事業を終え，新しい道徳教育の展開が待たれるわけですが，固めた地盤の上に，何を築き上げていくのか，積み残された課題を明確にしていく必要があると思ひます。

本日は，いうなればこれまで道徳教育の最前線に汗をかいていただいた先生方にお集まりいただきありがとうございます。今後の本県道徳教育推進の牽引役を担っていただく先生方でありまひます。これまでの集大成を御一緒に進めていければと思ひますのでどうぞ宜しくお願ひいたします。

それでは，早速，パネル討議に進みたいと思ひますが，はじめに，本日のパネラーの皆さんを御紹介いたします。

まず，皆さんから向かって左側から，福山市立光小学校 藤原典子先生です。藤原先生は，なんと前任校の尾道市立栗原北小学校から引き続き4年間道徳教育推進者として取り組んでこられたという貴重な体験をなされた先生です。

次に，安芸太田町立加計中学校の高橋一郎先生です。高橋先生は，平成16・17年度と加計中学校で道徳教育推進者として取り組んでいただきました。

そのお隣は，三原市立中之町小学校の松浦ゆう子校長先生です。中之町小学校は，平成15・16年度と県の指定校，そして今年度は文部科学省の「伝え合う力を養う調査研究事業」の指定校として全国からも注目される取組みを進めて来られました。

そのお隣は，廿日市市立大野東中学校の安田英幸校長先生です。大野東中学校は，平成16・17年度の県の指定校，そして今年度から文部科学省の「心に響く道徳教育推進事業」の指定校として命を大切に育てる道徳教育に取り組んでいただいております。本年度の県大会の会場校としてもそのすばらしい成果の一端を御発表いただきました。

そのお隣は，県立松永高等学校の岡田司校長先生です。松永高等学校は，平成16・17年度の文部科学省「心に響く道徳教育推進事業」指定校として取り組んでこられました。

高等学校における道徳教育は、全国的にもまだ研究例が少なく、現在も、大変注目をされております。

そのお隣は、呉市教育委員会学校安全課の石田孝夫指導主事さんです。石田指導主事さんは、平成14年度、当時仁方中学校在職中に「心の元気」という資料集作りで御協力をいただきました。その後、呉市教委に移られて道徳教育担当として呉市の道徳教育推進協議会を立ち上げていただくなど御尽力をいただいております。

最後に、本日、進行を務めさせていただきます、私、指導第三課道徳教育係の亀井です。

この4年間で文科省、広島県合わせてのべ75の指定校が生まれましたが、すべての学校の先生方と一緒に仕事をさせていただきました。生徒指導の困難校から教職員一丸となって学校再生を果たされた学校、道徳の授業改善で大きな研究成果を上げられた学校等、それぞれの学校で力強く前進をいただきました。事業当初から関わってきた古漬けならではのいい味が出せればと思っております。みなさん、どうぞ御協力ください。宜しく願いいたします。

さて、それではまず、「道徳教育で何が変わったのか」というテーマで、パネラーの皆さんから御提案を頂きたいと思えます。

2 道徳教育で何が変わったのか

最初に、道徳教育推進者の立場から、藤原先生、高橋先生に道徳教育で目の前の子どもたちがどのように変わったのかという視点でお話いただきたいと思えます。

それでは、藤原先生お願いします。

- ・子どもが変わった（推進者…藤原教諭、高橋教諭）

【光小＝藤原教諭】

本校は平成16年度より、広島県道徳教育実践研究校として2年間の指定を受けております。今年度は「思いを伝え合い、人とのかかわりを深める道徳教育」を研究のサブテーマとし、豊かな言葉の力を育て、思いを伝え合い、人、自然、社会との関わりを深めることを通して、児童の道徳性を育てていこうと考え、全教育活動のなかで道徳教育の充実を図ってきました。

昨年度から、学期ごとに、全校児童の道徳の時間に関する意識調査を行ってきました。「道徳の時間が楽しい」と感じている児童は、昨年度の5月実施時（84%）より肯定的にとらえている児童が増えました。児童は、道徳の時間での動作化・役割演技などの表現活動や、意見をたくさん発言できることで楽しいと感じ、友だちの意見を聞き、自分の考えを出し、みんなで学び合えることを楽しみにするようになってきました。道徳の時間を工夫することで、児童は学習意欲をもち、授業にのぞむようになりました。

また、「道徳の時間がためになる」と感じている5年生・6年生児童は、96.2%で、昨年度の5月実施時（91%）より肯定的にとらえている児童が増えました。児童は、学習内容の価値に気づき、自分の生活と重ねて考えることで、自分を見つめるようになってきました。言語表現や文章表現を通じた意見交流をとおり、コミュニケーション力がついた

と実感するようになっていきます。また、自分自身に向き合ったり、相手の立場にたって考えたりすることができるようになってきました。

今年度の指導の重点である「支持的風土のある学級・学年・学校集団づくりを進める」、
「『ことばの教育』との関連を図る」、「指導者の発問の工夫」に係る取り組みをとおり、児童は友だちを中心に、自分の思いを言葉に乗せ、伝え合うことができるようになった自分を実感しています。

また、様々な資料や人との出会いをとおり、多くの道徳的価値と向き合い、周りの人とのかかわりを深め合うことの楽しさを感じながら、自己の内面を見つめ、生活に生かそうとする意欲につなげようとする児童もいました。昨年度に比べ、「あいさつをすすんですることができる」児童が増え、友だちと協力しながら、自分の役割を果たそうとする児童の姿が多く見られるようになりました。

さらに、昨年度から、地域の伝統・文化を取り上げた総合単元的な道徳学習の単元を立ち上げ、地域の人材を道徳の時間にゲストティーチャーとして活用しています。こうした学習活動を通し、児童は地域に目を向け、郷土の文化や伝統を守り受けつぎたいという意欲をもち、地域行事へ積極的に参加するようになっていきます。

【亀井】 ありがとうございました。続いて、高橋先生お願いいたします。

【加計中 = 高橋教諭】

2学期末に、3年生が授業中の集中や発表などの学習態度について班ごとに5段階評価をしたところ、道徳は30点満点中28点で一番の高得点でした。これは本校が2年前に道徳の指定を受け試行錯誤で道徳教育に取り組み始めたときには考えられない結果です。道徳推進者として道徳の授業にかかわってきて一番感じるのは道徳の時間で大切なことが学べるという生徒の期待感が高まっているということです。その例として次のように感想を書いている生徒がいました。「道徳の授業でいろいろな問題について考えることによって、自分はこうしたいと思えるようになった。自分で考えることがとてもためになるし、友達の意見を聞くことが楽しみになった。」と感想に書いていました。

次の例を紹介します。昨年度、町村合併によって誕生した安芸太田町内にある三つの中学校が交流することをねらいとして、合同文化祭を行いました。本校は、ことばの教育として取り組んでいた群読を道徳教育とも関連させて取り組もうと、群読の教材に「世界がもし100人の村だったら」を取り上げ、「世界がもし100人の加計中だったら」として全校生徒による群読を行いました。

「世界がもし100人の村だったら」の内容は、・・・世界がもし100人の村だったら、75人は食べ物の蓄えがあり、雨露をしのぐところがあります。でも、あとの25人はそうではありません。17人はきれいで安全な水を飲めません。銀行に預金があり、財布にお金があり、家のどこかに小銭が転がっている人は一番豊かな8人のうちの1人です。・・・というような内容です。

群読の事前指導として世界の富の不平等な現実を実感する全校での活動を行った後、全クラスが道徳の時間に「世界がもし100人の村だったら」を資料に、私たちはどういうことができるだろうかということを考えました。そして、考えたことを日常生活と結び付

けようと、学校給食残菜ゼロの日を設定して全校で取り組みました。

その結果、設定した6回の全てで学校給食残菜ゼロを達成しました。また、学校給食残菜ゼロの日以外でも給食を残さず食べるようになるなど、残菜の量が取り組みの前よりも明らかに減少しました。これは、生徒の深まった思いが主体的な行動にまで結びついた例だと思います。合同文化祭の群読の発表でも、生徒たちは世界の現実から学んだことを真摯に受け止め、自分たちにできることがこの群読を通して観客に訴えることだという思いでしっかりとした発表をすることができました。また、生徒会としても行動の動きが出ています。本校には本校所有の茶畑があり、毎年地域と人といっしょに茶摘みを行ってきました。来年度からはこの茶摘みに新たな目的を持たせ、茶摘みの収益を世界の恵まれない子供たちに役立ててもらおうとしています。

本校は生徒実態から、主体性の育成を課題ととらえてきました。まだ課題もありますが、道徳を通して受け止めたことをもとに生徒が行動するようになった場面を見ることができるようになったのを感じています。

【亀井】 ありがとうございます。小・中学校の道徳教育推進者の立場から、目の前の子どもたちがどのように変わったかという視点でお話いただきました。

続きまして、それでは「道徳教育で教師は変わったのか」、毎日、熱血先生たちと一緒に教育活動に励んでおられます校長先生の目から見られた教師の姿についてお話をしたいと思います。

松浦校長先生、教師も変わったんでしょうか？

・教師が変わった (校長…松浦校長，安田校長)

【中之町小 = 松浦校長】

そうですね。教師は確実に変わっていると感じています。私の方からは3点お話をさせていただきます。

まず一点目ですが、子どもたちへの指導を通し、自らの生き方を見つめる教師として育っています。

道徳教育を進めるに当たって教師は、子どもへの指導を進めながら、同時に「人間として生きるとはどういうことなのか」自らの生き方を問うことが要求されます。指導における二重構造的性を含んでいると言えるわけです。そのことは教師自らが人間理解を深め、自らの人間性を高めることにつながると思われます。逆に言えば道徳教育は指導技術とともに、あるいはそれ以上に、教師としての人間性を問われる教育ではないかと考えられるのです。特に道徳教育の要となる道徳の時間の授業を見ていると、それは顕著です。教師の深い人間理解に支えられた授業は、子どもたちの心を開き、内面の奥深くに切り込むことが可能です。今の自分のすべてをかけ、「生きるということ」の意味を真剣に問う教師の姿は感動的ですからあります。まさに教師が変わってきたと考えさせられる瞬間です。

2点目は、人とのつながりを大切に作る心、人の生き方に謙虚に学ぶ姿勢が育ったと感じています。

一例を述べます。11月の研究会で一人の担当が「中越地震」をテーマに取り上げまし

た。地震により壊滅状態になった田んぼを修復し、米作りにかける老人の姿を取り上げることによって、「困難に打ち勝ち夢と希望を持って生きること」の大切さを学習したわけです。主人公にインタビューし意見を交流すること、ゲストティーチャーとしての出会い、その後の手紙での交流等を通し、遠く新潟と広島に離れながらも老人と教師との深いつながりができました。「わしは死ぬまでこの地でべと（田んぼの土）を守る」という言葉を聞いたとき、教師は何を感じたのだろうか。また、節くれだった指に鍬を握り、一鍬一鍬土を掘り起こしながら修復した田んぼで収穫した米で作った「ちまき」を口にしたとき、教師は何を考えたかと思います。人間のすばらしさに敬服したと思うのです。

3点目は、子どもを「見とる」力が育ったと思います。

道徳教育における評価、いわゆる子どもたちの道徳性の高まりをいかに評価するかについては今後の論議を待たねばなりません。それだけに「子どもを見とる力」、つまり、今、子どもたちが「何をどのように感じ、考え、捉え、判断し、行動しているのか」ということを察し受け止める力が強く要求され、そのことに対する教師の自覚は高まってきている。その力量も育ちつつあると感じています。

道徳教育は教育の全領域を通じて行うものです。この見とりの力は道徳教育の枠を超え、他の教科においても生かすことができると考えています。

【亀井】なるほど、ありがとうございました。教師一人一人の指導力という観点から、道徳教育によって培われた力について紹介いただきました。安田校長先生、中学校でも同じようなことが言えるのでしょうか？

【大野東中＝安田校長】

道徳教育で教師が変わった点については、3つあると思います。

まず1つは、道徳に対する意識や姿勢が変わってきたと思います。

道徳の研修を進める中で、「道徳の時間」の重要性を認識し、主体的にやる授業になってきました。特に、授業をとおして生徒の変化を見る中で益々道徳の重要性を感じるようになり、もっとよい道徳の授業をと、授業教材を探すようになり、授業の工夫が積極的になされるようになってきました。また、公開研究会を積み重ねていく中で、講師からの指導・助言や教員相互の話し合いにより、導入の工夫・揺さぶり発問の効果的な取り入れ方・教材選択の視点、板書の仕方の工夫など、各教職員の指導力の向上が図れるようになってきました。また、道徳の時間だけでなく、各教科や各領域で道徳との関連性など行事等を含めた価値関連表を作成し、道徳性の向上を意識した取り組みがなされるようになってきました。

2点目は、生徒に対する意識や姿勢に変化が現れてきました。

「道徳の時間」は、様々な考え方を引き出し、意見交流できる場面を設定する事も多く、教科では見られない生徒一人ひとりの考え方の中から、それぞれの個性や良さを見つけることができるようになり生徒理解に役立っています。また、様々な指導場面では、生徒にどうすればよいか考えさせる姿勢をもつなど、生徒指導にも工夫がみられるようになってきます。

3点目は、教職員間の意識や姿勢に変化が現れてきたことです。

「道徳の時間」実施のために、学年会を中心に十分時間をかけて検討され、統一した取り組みがなされるようになりました。このため、お互いの授業を見合うことにも抵抗もなく、自分の学級以外のクラスを使つての授業も行うことができるようになっていきました。

また、道徳という共通の話題をとおして、教職員間の日常的な話題が増え、生徒に関する情報交換が頻繁になされ、すべてに同じベクトルで取り組めるようになり、学校運営にも大変プラスになっています。

【亀井】 ありがとうございます。御二人のお話に、共通していたのは児童生徒を「見る力」とか「生徒理解」という言葉で示されていますが、教師が子どもと向き合う力や教師自身が成長しようとする力が確実にアップしているということですね。

それにしても、小・中学校でこれだけの変容が見られたということですが、高等学校ではどうだったのでしょうか。道徳の時間が特設されていないわけですから、小・中学校と同様には考えにくいのですが。その辺のところを松永高等学校の岡田校長先生にお伺いしたいと思います。

・学校が変わった (校長・教育委員会関係者...岡田校長、石田指導主事)

【松永高校 = 岡田校長】

本校では、「地域社会に貢献できる生徒の育成を目指した道徳教育の展開」を研究主題として、この2年間取り組んできました。

高校には、小中学校のような「道徳の時間」がありません。総合学科高校である本校では、1年次での「産業社会と人間」、2・3年次での「総合的な学習の時間」を、3年間を通して行う道徳学習の一つの核としてきました。

ここでは、職業観・勤労観を育成し、将来の進路選択、進路実現を確実なものにしていくよう授業展開をしてきました。地域の教育力を活用した取り組み、例えば松永地域での1年次でのインターンシップ、3年次での松永探検隊等の課題研究などが、その中の一つと言えます。

生徒指導上しんどい状況にあった本校では、高尚な中身を求めるのではなく、「身の丈にあった」道徳教育の実践を目指しました。

そこで、実現可能な三つの目標（「挨拶から始めよう」「きれいな学校私がつくる」「学びがいのある学校づくり」）を定め、ポスターの掲示等様々な広報活動も実施したり、毎朝の校門(昇降口)での頭髪・服装指導においても、「おはよう」と互いに声を掛け合いながら実施しました。

その成果でしょうか、生徒の様子から、少しずつとげとげしさがなくなり始め、「おはようございます。」など、明るく返事が返ってくるようになりました。

このように本校の「身の丈にあった」道徳教育を実践することによって、当初は「価値の押し付けである。『修身』の復活ではないか。」と非協力的であった教師からも、「学校行事やHR活動などで生徒が活躍できる場面を積極的に取り入れ、生徒の自己存在感を高める人間的ふれあいを大切にした道徳教育は、積極的な生徒指導と同じものを目指している

ことがわかった」とか「生徒の夢や希望を育む教育，志を高める教育が松永高校における道徳教育であり、『管理から育成へ』の方向性がわかった」と言った声が聞かれるようになりました。教師の道徳に対する見方，意識が変わってきたことが道徳教育を進めていく中で，大きく変わった点です。

【亀井】 ありがとうございます。高等学校においても，確実に変容が見られていることがよくわかりました。児童生徒や教師だけでなく，学校そのものが変わっていくんですね。先日，県内の私立の高等学校から，中央で行われる道徳教育の研究協議会への参加希望が寄せられました。高等学校においても，道徳教育の可能性というものを充分に感じとられているということだと思います。こういう熱のようなものにどんどん県内の高等学校が感染していった欲しいものだと感じました。

さて，本日は行政の立場からお話がいただけるよう石田指導主事さんに参加いただいておりますが，ここまで聞いてこられて，学校というものを一歩外から見てこられた立場からどのように感じておられますか？やはり，道徳教育で学校は変わるのでしょうか。

【呉市教委 = 石田指導主事】

ただいまご発表されました各学校の先生方のご意見にもありましたように，まさに，私どもは，このような学校づくりを目指してきました。

さきほどから，それぞれの先生方のお話を伺っていると，お言葉以上に熱いものが伝わってきました。このように，先生方の意識が変わって，確かな取り組みが意図的・計画的に進められて，先生も子どもも，ともに成長していかないと，結果として学校が変わったとは言えないと思います。

例えば，単に学習環境を付け焼き刃的に整備したこととか，ある特定の教師の力量にたよっている状況では，学校が変わったとは，なかなか言えないですね。いわゆる全ての先生が関わるという意味での「校風」と言われるものを創っていけるような，子ども達に学校という社会の一員としての確かな自覚を培いながらの取り組みでありたいと思うのです。

私ども指導主事は，概ね，広く，たくさんの学校と関わりますから，単純に，各学校の比較はできません。

そんな中で，「確かに，学校が変わったなぁ」と感じた事例を二点ほどお伝えします。

1点目は，先生方の私どもを迎えてくださるときの対応が訪問させていただくたびに変わっていったことです。この中には「笑顔」「挨拶」「服装」「礼儀」といった基本的なものから，「意欲」「熱意」まで，幅広くあろうかと思えます。こういう学校は，たいてい子どもへの接し方はもちろん，地域の方々や保護者に対しても，あたたかで節度ある対応がなされています。結果として，子どもに範を示すとともに，子どもの内面を深く理解しようとするのが日常的におこなわれるので，生徒指導にも大きな効果があったと思います。「子どもに求めたい力は，まず大人が実行する」ことを実践されているんだなぁと思いました。

2点目は，先生方が「大変さ」「忙しさ」を「できない」ことの原因にしなくなったこと

です。現実にはいろいろと大変なことがあるとは思いますが、子どものために「もっとこういうふうにしたい」とか「ああやったら、心に響くんじゃないかな」などと、会話の質が変わってきたことです。このことは、授業後の研究協議会などで、よく感じたことです。以上です。

3 道徳教育の何が変わったのか

【亀井】

ありがとうございました。パネラーの皆さんから、道徳教育を通して子ども達や教師集団、そして学校がどんな風になって行ったのかということをお聞きいただきました。会場の先生方もご自身の学校の取組を振り返られて聞いておられる姿をこちらから拝見することができました。

さて、それでは、いったいこれまでの取組を通して広島県の道徳教育の何が変わったからこのような成果が生まれてきたのかということをお聞きしてみたいと思います。ご承知のとおり、是正前の本県の道徳教育の状況というものには反省しなければならない点が多々ありました。「是正から改革へ」という歩みの中で、本県の道徳教育はどう改革されてきたのでしょうか。

・ 授業 (推進者…藤原教諭, 高橋教諭)

まずは、道徳の授業はどう変わったのか、たくさんの先生方とTTを組んで数え切れないほどの授業をしてこられた推進者の先生方にお聞きしてみたいと思います。光小学校の藤原先生をお願いします。

【光小＝藤原教諭】

本校では、思いを伝え合い、人とのかかわりを深める授業づくりをめざし、総合単元的な道徳学習の創造、道徳の時間と体験活動との関連、ゲストティーチャーの活用等の学習指導の工夫を行ってきました。

まず、人との関わりを深める具体的な取り組みとして、児童にとって身近な地域の方をゲストティーチャーとして授業の中に活用していきました。毎朝、夕、児童の登下校時に子どもたちの安全のために見守りをしてくださっている光学区地域安全推進協議会の方に参加していただき、児童の発言を聞き、あいさつに関する児童に対する思いを話していただきました。児童は、毎朝会っている地域の方の話をお聞き、道徳の時間に学習した内容が、翌日からの生活の中で道徳的実践としてつながるようになりました。

また、5年生では、総合的な学習の時間に取り組んだ「草戸なすの栽培」でお世話になったゲストティーチャーをビデオ取材し、ゲストティーチャーが実際に、地域のお祭りや行事で活動しておられる様子をビデオレターとして道徳の時間に提示しました。こうすることで、45分間の授業の中で、ゲストティーチャーの話をもっと効果的に活用できるようになりました。

次に、児童の心に響く道徳の時間を創造するため、資料分析を大切にしてきました。低学年では、授業の導入を工夫しました。道徳の時間に必ず登場するキャラクター人形やピ

デオ視聴，クイズ形式を取り入れました。また，資料提示を大型紙芝居や担任による楽器演奏，パワーポイント，T1T2による役割読み，ペープサート等を取り入れることで，児童は興味をもって，道徳の授業の中へ入ることができ，容易に状況把握をすることができるようになりました。

また，板書についても，時間の経過を追って右から左に書き進めるだけでなく，場面を対比するために上下や左右に分けて記したり，考えさせたい場面を中央においたりするなどの構造化を図ったり，色テープを使った心情曲線などの工夫をすることで，児童はねらいとする価値について深く考え，迫ることができるようになりました。

このように以前とは比較にならないほど授業が変わってきました。そして，このように学年での打ち合わせや授業研究で協議を重ねるというプロセスを経ることにより，道徳の時間だけでなく，他教科，特別活動，総合的な学習の時間の充実という嬉しい変化が見られるようになってきました。

【亀井】

ありがとうございました。細やかな配慮にもとづく授業改善が着実に行われてきたことが伺えました。さて，続いて，中学校では，どのような変化がみられたのでしょうか。高橋先生はどんなふうにとらえておられますでしょうか。

【加計中＝高橋教諭】

大きく変わってきたことの第一に，道徳推進者と学級担任による授業計画の検討会の質の向上が挙げられます。指定1年目の昨年度1学期は，道徳推進者と学級担任が独自の案を持たず，「さて，どうしようか」という暗中模索の状態から授業計画の作成を始めていました。それが2学期になると，「次はどの資料を用いてしようか」という見通しを持って授業計画の検討を行うようになりました。さらに3学期になると，学級担任から「次はこの資料を使ってみようと思うのだが，意見を聞かせてほしい」という具体的な提案がなされるまでになりました。この段階から，検討会において，資料をもとにねらいに迫る発問を考えたり，資料を工夫したりできるようになりました。そして，今年度はほぼ全学年の全時間について，指導案と資料を作成した上で検討会を実施することが可能となりました。その結果，具体的な打ち合わせを行うことができるようになり，検討会は短時間で効果的なものになりました。

検討会が変わったことで授業の質も向上しました。中心発問は，まず個人で考えさせた後，班で意見交流し，そしてクラスみんなに紹介したい意見を小黒板に書いて全体に発表するという基本のスタイルができました。また，授業者の意識の向上により，まず資料ありきの授業ではなく，授業者が価値項目の中で生徒に投げかけたい中心となる価値を絞り込み，それを実現するに足る資料を選定するという授業もできるようになりました。

本校は道徳の授業づくりで本物や現実とのかかわりを追求してきました。生徒を含む私たちを取り巻いている現実の問題や社会の矛盾の中には，道徳的価値と様々な利益がぶつかり合っているものも多くあります。例えば，「自然に優しく」といえば，「人間に厳しく」ということです。そのような安易に結論が出せない問題を考えることによって生徒が深く考える授業を生み出すことができるようになりました。

最後に、学校における道徳の授業の位置づけが変わってきたということを言おうと思います。最初は、道徳の授業をするだけで精一杯でしたが、途中から学校教育全体の教育とのかかわりが見えるようになりました。そして、今年度は生徒の実態や課題をふまえて生徒をどう育てたいかということと関連付けて道徳教育が考えられるようになりました。これはあまりにも当然のことですが、実は、本当の意味で本校の学校としての本質が変わってきたところですよ。

【亀井】

ありがとうございました。道徳の時間の指導方法はもちろんのこと授業に対する考え方の根底部分から変わってきたということがわかりました。

・協力体制 (校長…松浦校長, 安田校長, 岡田校長)

さて、続いて校長先生方には、道徳教育をとりまく学校体制・組織体制は変わったのか、管理職としてどう見ておられるのかを伺ってみたいと思います。

それでは、松浦校長先生からお願いします。

【中之町小 = 松浦校長】

私の方からは、協力体制についてお話をさせていただきます。協力体制は明らかに変わったのですが、これは必然的に変わらざるを得ない状況が生まれたからだと考えています。その理由として二つあげることができます。

一つには、誰でもが指導者になる可能性を持つという道徳教育の特異性があり、そのことが協力体制を組むことを容易にしてきたととらえています。

一人一人が持っている道徳的価値に差はあれ、人間は、誰もが独自に道徳性を持っています。道徳教育は、人間としてのよりよい生き方(道徳性)について学ぶ教育であり、その意味で子どもたちにとっての人生の先駆者である誰もが教える側に立つことができるということです。このことにより「生き方を教える」という共通の視点に立って協力体制を仕組むことが、あまり抵抗なくできたように思います。

例えば道徳の時間のゲストティーチャーです。管理職はもとより、同学年の担任、異学年の担任、養護教諭が当たり前のこととしてゲストティーチャーとして参加しています。保護者や地域住民の参加も多いですし、時には地域のゲストティーチャーの生き方そのものを資料として取り上げT・Tとして授業を仕組むことも行いました。ともに子どもたちをよりよく育てようとする共通意識のもとに、担任と連携をとりながら授業を構築していくことは実に楽しいものです。

二つ目は子どもたちを取り巻く環境が多様に変化し、担任一人の力でより豊かな道徳教育を推進するには限りがあるということです。

子どもたちにとって豊かな心を育てるに値する自然環境、社会的環境、物的・人的環境は決してよしとする状況にはありません。校内の協力体制はもちろん、保護者の力、地域社会の力を借りる必要があります。より多くの人とのかかわりの中でこそ子どもたちはより豊かに育つと思うからです。

こうした中で、地域社会との連携は着実に実り多いものになりつつあります。

例えば、3年前にはじめたラジオ体操による高齢者と子どもたちの交流が、一部の地域から全域に広がりつつある。このことが「地域での声かけ」にも発展し、新たなつながりを作るとともに、「地域で子どもをどのように育てることができるか」という住民の意識の高揚にもつながっています。

協力体制を築くということは、子どもたちを育てるという思い(目標)を共有することであり、今後さらに推し進めていく必要性があると考えています。

【亀井】

ありがとうございました。続いて安田校長先生お願いします。

【大野東中 = 安田校長】

私は、道徳教育の中身づくりを行うことによって、協力体制に変化がみられるようになってきたと考えています。

まず1点は、研究推進のための組織づくりを行いました。本校では、昨年度まで研究部がなく、県の指定を受け、道徳教育推進プロジェクトを立ち上げ1年目の取り組みを行いました。このため、自分の分掌の業務にプロジェクトの道徳も入ってくるのですから、大変多忙で、十分内容を吟味するところまでいっていませんでした。このため、今年度は研究部を立ち上げ、研究部で大筋を立て、学年会で吟味するといった道筋ができ、校内組織のスリム化が図れるようになってきました。この学年会では、道徳の時間の指導過程で中心発問を核として構成し、生徒の興味・関心を喚起するための導入の工夫や効果的な終末のあり方を検討するなど、授業のねらいに迫れるような工夫がなされ、より充実した道徳教育を行うことができるようになりました。

2点目は、生徒の活動を生かすための取り組みができるようになったことです。道徳系の活動として、本校生徒に求められる道徳性についての町内でのアンケート及び集計や「道徳の時間」において使用する教具の作成、プリンター・花壇での花作りなど生活環境を整える活動などを行いました。生徒会は、あいさつ運動、清掃ボランティア活動・アルミ缶のリサイクル活動などを行っています。これらの活動から、学年の枠を超えた仲間意識が高まるとともに、仕事への責任感や自覚が高まり、「道徳の時間」学んだことの実践の場となりました。

3点目は、地域や保護者の協力が得られるようになってきたことです。「道徳の時間」に地域の方々をゲストティーチャーとして招いて、郷土愛・伝統文化などの授業をやっていただく、保護者をゲストとして授業に参加していただき、親の考え方を述べていただくなど、積極的な授業への協力も得、教師だけでなく多くの大人の考え方・ものの見方を学習する機会が多くもてるようになりました。また、道徳教育通信「心の詩」を発行し、各家庭・地域に配布することによって、保護者から「学校でどんな道徳の授業をやっているか分かる」という評価も得、学校で行われている「道徳の時間」が家庭でも話し合われるようになってきています。

【亀井】

ありがとうございました。こうした変化というのは、高等学校でも同様に見られるんで

しょうか。その辺を岡田校長先生に伺いたいと思います。

【松永高校 = 岡田校長】

高等学校でも同様の变化はありました。本校では、広島大学大学院文学研究科 教授 越智貢 先生の指導により、私たち教師ひとりひとりが考えさせられ、教師集団の中に次第に変化が現れてきました。

越智先生からは、「全校集会で、注意や命令ばかりしていませんか。」「授業では、生徒がその程度だからといって教師自身が納得していませんか。」「生徒は、先生が自分たちをバックアップしてくれるという体験をしていないのではないですか。そのように実感できるものを増やしていますか。」と、具体的な指導を受けました。そうした中で、私たち教師の道徳教育に対する見方が変わってきたのです。

たとえば、1年目は、まず、「教師が生徒の名前を呼んで指導する、挨拶をしていく」ことに取り組みました。生徒一人一人を名前と呼ぶという基本的なことができていなかったのです。そして、生徒からも返事が返ってくるようになりました。このことから、それまでよりも、教師と生徒の距離が近づいてきたと感ずるようになりました。

そして、2年目は、「生徒の活躍の場面を積極的に作っていこう。」ということで、文化祭などで積極的に生徒の活躍場面を取り入れてきました。

また、教職員から「授業を大切にしよう。つぎは授業だ。」という声がしだいに高まり、「教員全員が公開研究授業をしよう。お互い授業を参観しながら授業力を高めよう。」ということになりました。

小・中学校の先生方は驚かれるかもしれませんが、本校の規模の高等学校では、教師全員が揃って校内研修を行うということが大変難しいのですが、指導主事を招いての全員参加での校内研修会が開催でき、道徳教育への意識が高まり「全員で取り組む道徳教育」という基盤ができたので、互いに気軽に授業を参観できる雰囲気ことができました。

特に、授業の中に道徳性を育成するという視点を明確にし、公開研究授業ではその視点を明示した指導案の作成を進めてきました。高校の教師にとっては、初めての経験なので戸惑いがあったのも事実ですが、例えば、数学・理科の授業では「真理愛」を意識した授業を展開するなど、それぞれの単元で取り上げていきました。

また、2年目に入ってから生徒に実施した生活アンケートからは、生徒自身が授業に対して物足りなさを感じ、教師にもっと分かる授業、質の高い授業を求めるようになっていくことがわかりました。

このことによって、教師は、道徳性育成の視点を入れた授業が生徒の学習意欲を高めていることを理解しました。教師の道徳に対する考えが変わり、道徳を受け入れた動きが出てきたことで、道徳教育推進委員会が動きやすくなってきております。道徳教育のもとに教師集団のベクトルが定まり、学校がダイナミックに動き出したという実感を持っています。

【亀井】

ありがとうございました。道徳教育で教師が変わらざるを得なくなった、児童生徒も変

わった、そして、学校も変わらざるを得なくなったということでしょうか。単に変化したというのではなく、求める方向に向けて動き出したという印象を受けました。

さて、ここまで授業、教師、そして学校体制が変わってきたということでお話を聞きました。石田指導主事さんは、本県の道德教育の変化についてどんな風にご感想をおられるのでしょうか。

・ネットワーク (教育委員会関係者...石田指導主事)

【呉市教委 = 石田指導主事】

私は、ネットワークが結ばれつつあるというのを強く感じています。

この全体報告会もそうですが、県下の同じ「志」を持つものが集まり、研究を進めていく機会は、そうあるものではありません。この事業は、広島県教育委員会の大ヒット事業です。私は、本日お集まりの先生方は、夜空に輝く一等星のイメージがあります。

これらを結びと、広島県には、きれいな星座ができているんですね。

ここに一つのデータがございます。呉市道德教育推進協議会の会員に、今年度5月にとったアンケートですが、「ブロック別研修等、他校との授業実践交流は必要だと思いますか？」の問いに対して、95%の先生が「必要である」と考えておられました。それに対して、「自校の現状において、近隣校との道德教育に関する情報交換や研修は充実していると思われますか？」の問いに対しては、27%の先生しか、充実しているとは考えておられませんでした。

そこで、これらの課題を解決するために、県の指定校3校、市の指定校2校の計5校を「カシオペア座」のように拠点校として、ネットワークを創り上げようと考えました。ネットワークも、小学校同士の小・小連携、小学校と中学校の小・中連携など、いろんなタイプがあります。保育所や幼稚園、高等学校も含めた連携もあります。呉市では、市内88校を、この拠点校を中心に、幼稚園、高校を含めて地域別に3つのブロックに分けました。

1学期の間は、拠点校同士での授業研究交流をおこないました。夏休み以降は、全体研修会では管内の全ての小・中学校で、ブロック別研修会では、ブロック内の各小・中学校が、それぞれ集まって授業実践交流を深めてまいりました。

ある一つのブロックでは、小学校での授業研究に、近隣の高校の先生も参加され、一緒に研修した実績もあります。子どもの視点に立った、目線にたった研修の場を持ったことが、非常に好評でして、事後のアンケートにおいても、参加者の98%の方が「有意義であった」と回答しておられます。

最後になりますが、学校や校種を越えて、資料や指導方法などを学び合うのも大きな成果ですが、10年以上の長いスパンで子どもの育ちというものをが分かり合えることや、他校の先生方や他の学校のことが分かり合えることも大きな成果と感じております。

【亀井】

ありがとうございました。張り巡らされたネットワークを通じて、私たちが何を学ぶのか、そして、そのネットワークにどんなことを乗せていくといいのかヒントをいただいた

ような気がいたします。

さて、ここで「心の教育」そして「道徳教育」で今、何が求められているのか、その最先端でどんな取組がなされているのか、その概要を発表していただき学んでみたいと思います。今年度、文部科学省は新たに「命を大切に作る心を育てる道徳教育」に特化した事業や、「伝え合う力を養う調査研究事業」を興されました。また、「高等学校における道徳教育」にも力を入れておられます。本日のパネラーとなられた校長先生方の学校で、どんな取組がなされているのか、推進者の先生方に御協力いただきます。

4 今、どんな取組がなされているのか

- ・伝え合う力を養う道徳教育（中之町小推進者）

それでは、中之町小学校の行廣先生お願いいたします。

- ・命を大切に作る道徳教育（大野東中推進者）

それでは、大野東中学校の村本先生お願いいたします。

- ・高等学校における道徳教育（松永高校推進者）

それでは、松永高等学校の前田先生お願いいたします。

5 どんなことが課題として残されているのか

【亀井】

ありがとうございました。短時間ではありましたが、それぞれの学校の取組の様子を伺うことができました。

さて、この協議も指導案でいうところの終末へと入らなければなりません。

最後に、それぞれのパネラーが、これまでの取組を通じて感じておられる課題を御発表いただくことで、4年間で積み残された課題を明らかにし、これから歩むべき道の指針としていきたいと思います。

早速ですが、藤原先生からお願いいたします。

【光小＝藤原教諭】

本校の今までの取組をふりかえり、次の5点を今後の課題として考えています。

1点目は、学校での道徳教育を進めていくうえで大切な、支持的風土のある学級・学年・学校集団を築いていくことが大切であると考えています。自分の思いが出せる集団、仲間の思いを受け止め、共感できる集団を育てることにより、お互いのよさを認め合い、ともに高まっていこうとする子どもを育てる必要性を感じています。

2点目は、「道徳の時間及び、道徳性の高まりに関する評価」として、今年度から始めた、個人記録表等を継続して活用し、児童を肯定的にとらえ、一人一人の道徳性の育ちを見取り、指導に生かしていくことを大切にしていこうと思っております。

3点目は、「心のノート」を道徳の時間以外で活用する場を増やし、児童の心の成長の記録とするとともに、「心のノート」が、児童と学校、家庭が心を通わせ合う「心のかけ橋」となる取組を継続することにあると考えています。

4点目は、道徳教育が家庭、地域と連携して進められるよう、学校で取り組む道徳教育を地域に発信しながら、学校・家庭・地域が一つとなり、「思いを伝え合い、人とのかかわりを深める光っ子」を育てていくことです。

5点目は、児童が、友だちや先生、家族、地域の人や自然とのかかわりの中で、自分のよりよい生き方を求めることができるよう、今後も研究を進め、教職員の力量を高め、児童の心を豊かに育てる道徳教育を、全教育活動の中でさらに推進していくことだと考えています。

【加計中 = 高橋教諭】

まず最初に、道徳教育にかかわる校内の体制作りが課題であると考えています。それぞれの教師が持っている経験や考え方をT1とは違う視点で授業に持ち込んでもらうために、今年度T2には道徳担当者だけでなく、学年会の副担にも授業に入ってもらっています。しかし、道徳の授業に直接かかわる者とそうでない者との間の意識の格差がどうしても生じています。教育に一貫性を持たせるために担任の役割は大きいものがありますが、多様性や変化をもたせるためには学校全体での教職員の参加協力体制をどう作っていくかが課題です。これにかかわっては亀井指導主事さんにアドバイスをもらったことですが、来年度、すべての教員に自分の専門、または得意な分野で道徳と教科、その他の活動をセット化した数時間のプログラムを提案してもらい、直接道徳教育にかかわってもらうことによって教育効果を高めることができないかと考えています。

次は、指定校と周辺校の格差の問題です。今年度、安芸太田町内にある小学校10校と中学校3校が参加する安芸太田町道徳教育推進協議会を立ち上げ、授業研究を中心に活動を進めていますが、指定校以外の学校の参加が難しいという問題点が浮かび上がっています。原因はいろいろあるかと思いますが、安芸太田町には小規模校が多く各校の道徳推進者が担任やその他の校務分掌を受け持っていてなかなか一様に出にくいということがありました。このことに関しては単なる指定校の呼びかけということを超えた何かが必要だと思いました。しかし、参加校の意識の格差を埋める手段の一つとして、情報の共有化があると考えています。安芸太田町では町内の共有ランシステムを活用して協議会の日程や指導案などを交流することができるようになっていますが、一層の有効活用がカギであると考えています。

最後に、現実と結び付けて考えることのできる力をつけることの必要性について述べようと思います。最近、小・中学生による生命を軽視した事件が大きな社会問題となっていますが、子供たちが破壊的な衝動に駆られたとき、それを踏みとどまらせるためには、「その後自分がどうなるのか」など現実と結び付けて考えられる力が不可欠だと考えています。この現実的な想像力を学校教育の中で身につけさせる方法として、現実を教材化してそこから学ぶということと、現実との接点である体験活動を充実させることの2つを考えており、これらを道徳教育と関連させてさらに取り組んでいきたいと考えています。

【中之町小 = 松浦校長】

「指定校と周辺校との格差をどのように是正するか」このことを中心に述べます。

まず、指定校は研究を広く公開し、「学びの情報」を提供することが大切だと思います。

平成15・16年度広島県道徳教育実践研究指定校になって以来、多くの講師を招き指導をお願いしました。そのつど、「ともに学ぶ」という視点にたち校内研修会への参加を他校へ呼びかけてきました。はじめのうちは隣接校、または教育事務所管内における道徳教育実践校への個別の呼びかけであったが、行政の主導により、情報発信が意図的に行われるようになり、学びの場が広がりました。今後も「ともに学び、道徳教育を充実させよう」とする視点を各校が共有することが必要であると感じています。

次に、リーダーを育成することが重要だと考えています。

リーダーの育成は喫緊の課題です。本年度、本校は三原市教育委員会との共催により年間4回の道徳講座を開きました。うち3回は授業公開を行いました。講師をお願いした関西学院大学大学院の横山利弘先生の助言もあり、各校の道徳教育担当者のみならず、教頭先生も受講の対象としました。道徳教育の概略を知り、指導案を書くことができ、道徳の授業ができる教員を育てるために、学校の核となる人材を育てることがねらいでしたが、大きな成果を得ることができました。いくつか声を紹介します。

- ・道徳の授業の具体的な指導について、多様な角度から考察することができた。もう一度指導要領の趣旨を振り返るとともに、職員への指導に大変役に立った。
- ・道徳担当と一緒にいくことができたので、学んだことを再確認できた。12月の道徳参観の指導案保護者への啓発をしていく予定である。

リーダー育成の方法はいくつもあると思いますが、行政を巻き込んだ活動が必要となると思います。

最後に、各地域の推進協議会を充実していくことが重要だと考えます。

まずは、推進協議会の活動を、点から面へと広げる必要があります。推進体制の問題あるいは推進内容の再検討等々含め今後の大きな課題であると考えます。

【大野東中 = 安田校長】

課題としては、4点あげられます。

1点目は、道徳的実践の場としての行事の工夫があげられます。

「道徳の時間」の中で学んだ道徳性を発揮する場を日々の学校の活動、例えば掃除、SHR、委員会活動・係の仕事、部活動などを中心に仕組んでいかなければならないと考えています。また、本校では、学期に1回、保護者・地域と連携したボランティア清掃を行っていますが、その他にも、本校の道徳教育を地域に発信し、地域においても実践していく場としての活動を工夫しなければいけないと考えています。

2点目として、小学校との連携が必要だと思います。

9年間の中で、生徒の道徳性をいかに育てていくか。地域での道徳指針協議会もあるが、学校間で、9年間を見通した指導計画の作成等を行う必要があると思われる。また、今後の、学校選択制や小・中一貫校の導入なども視野に入れながら、しっかりとした連携が図れるよう、まずは、研究主任レベルでの交流を図っていかねばと思っています。

3点目として、ことばの教育・キャリア教育との関連を図ることも必要と思われる。

「道徳の時間」はある意味、資料との対話、クラスメートとの対話、自分との対話など、様々な対話が行われ、新たな自分探しの時間でもあります。また、これまでの自己の生き

方を振り返り、未来へ向けて自分の生き方を設計していく時間でもあります。このことを考えれば、ことばの教育やキャリア教育との関連をしっかりと図っていかなければいけないと思っています。

最後に、この2年間で、多くの地域の方々、保護者をゲストティーチャーあるいはゲストとして「道德の時間」に参加して頂きましたが、打ち合わせ時間の不足から、授業の中で十分活用できなかったり、授業内容が専門的であり、生徒の興味・関心を喚起する授業ができなかったりすることもありましたが、今後も、効果的な幅広い授業を行うためにも、ぜひ工夫していこうと思っています。

【松永高校 = 岡田校長】

ご存知のように、高校には道德教育のかなめとしての「道德の時間」がありません。学校の中で、それぞれの領域で日頃から行っている道德教育を補充、深化、統合する時間をどのように設置していくか。それを、HRの時間に行うのか、総合的な学習の時間に行うのか、3年間を見通したベストなものを作っていきたいと考えています。

高校生は、社会的ルールなど、これは良い、これは悪いということは十分に分かっていると思います。ただ、それを行動に移すことができない場合が多いのではないかと。本校では、生徒が実社会に出る前に、この十分に分かっているが行動に移せないことを行動できるようにするために、どのようにして生徒の内面に迫っていくかを考えています。その一つの方法として、カントのような聖人君子ではなく、普通の社会人として必要な道德性を越智先生に御指導いただいた「ロングタームエゴイズム」(したほうが長い目で見たら得) という視点から、まずは身に付けさせたい。そのために、どのようなカリキュラムをつくっていくかを考えています。

わたしは、今回の事業の取り組みから「5年後の松永高校を見てください。」と言っています。地域の中学生在が入学を希望する学校、地域に貢献できる学校として在り続けるためには、いかに道德教育を深めていくかが大きなポイントであるととらえています。また、その評価をどのようにしていくかを道德教育推進委員会を中心に今後の活動を深めていこうと思っています。

【呉市教委 = 石田指導主事】

私は、行政の立場からこれまでの先生方の御意見をお聞きして、それぞれの学校が、それぞれの特色を出されていることに感動ともいえるべき驚きを感じております。個性というのは、その主体性だと思いますので、子どもたちのため、子どもたちの未来のため、いかに思いを熱く持って取り組んでおられるか、取り組もうとしているか、は大切にしたいところだと思っています。

このことをふまえて、私の思う課題といたしますが、今後、こうしていかなくてはいけないと感じている、私の夢のようなものを大きく2点挙げたいと思います。

1点目は、推進協議会を中心に、呉市の道德教育の一層の充実を図っていきたくと思っています。これまで出てきた課題は、うまくいけば推進協議会事業でおこなえることが多いことと確信しました。推進協議会でリストを作成し、とりまとめておいて、必要な学校に必要なゲストティーチャーを派遣するというようなGTの共有化なども一つの例ですし、所属の校長先生と連携を密にすることによって道德推進者を必要な学校の校内研修等に指

導者として派遣することも考えております。これらの場合は、年度当初に人材バンクとして、各学校に情報提供してまいります。また、近隣町にも先進的に取り組んでおられる学校や、優秀な実践者がおられますので、市町を越えた交流も実現しそうです。

2点目は、「成果と効果は違う」ということです。指定校は、それぞれのご研究で、多くの成果を上げられました。私たち行政は、事業を市民や県民の税金を使って行うことに対して、その効果がどうであるか、を大切にしています。国語としての意味は違うかもしれませんが、成果と違って効果は「ずっと残るもの」「広く普及するもの」というような捉えでおります。つまり、指定校として積み上げてこられた成果が、子どもたちの心の元気に対してどのような効果を生み、呉市や広島県の道徳教育にどれほど普及して根付いていくのかということです。私は、今後もこのことについての効果測定をしていこうと思っています。

6 まとめ

パネラーの皆さんどうもありがとうございました。皆さんの貴重な御意見をもとに本県の道徳教育の歩みを再確認することができましたし、今後の進むべき道も明らかになってきたように思います。

さて、最後になりますが、私の方で簡単ではありますが整理をさせて頂きたいと思いません。

「道徳教育で何が変わったのか」

- ・子どもたちの夢や希望を育てた、生きることへの探究心を高めた
そのことはひいては、教師や学校に寄せられる期待や担う責任が大きくなったということ

「道徳教育の何が変わったのか」

- ・授業が変わり、学校体制が変わり、ネットワークが生まれてきた
そのことはひいては、道徳教育が熱心な一人の教師の所有物ではなくなったということ（これまでは教師個人に任せられていた）

そして積み残された課題

- ・すべての学校で、すべての子どもたちが（各市町の推進協議会の活性化）
- ・一過性に終わらせないための人材育成（道徳からもエキスパート教員が）

指導第三課として

- ・人材育成，ネットワーク充実のための事業展開を考えていきたい
- ・道徳の時間の地域公開の推進（参観日含む75%，懇談会58%）
- ・保護者参加型授業の普及
- ・コンテンツの共有（学習プログラムの蓄積）